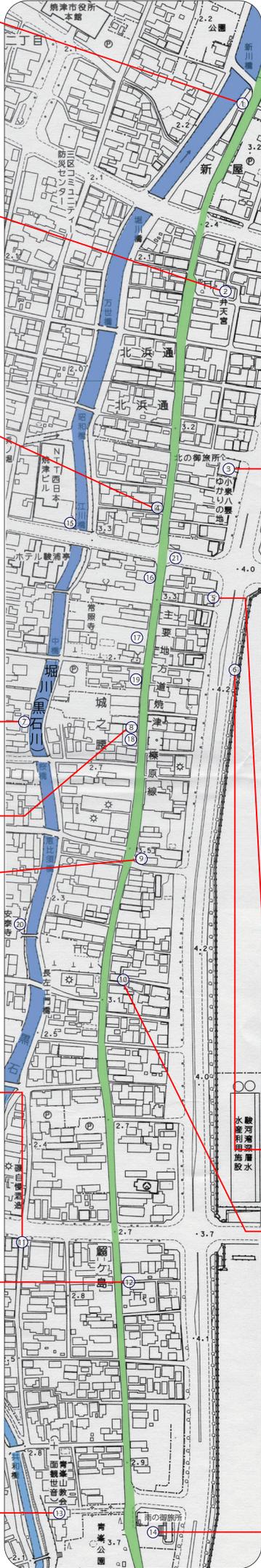


探しにいくらう！浜通り

浜通りは日常生活の場所です。散策にあたっては敷地に無断で立ち入らないなど、マナーを守って見学しましょう。



①小泉八雲風詠之碑
明治時代の文豪・小泉八雲を偲んだ石碑。八雲は明治30(1897)年に焼津を訪れて以来、晩年までのほとんどの夏を焼津で過ごし、「焼津にて」「乙吉のだるま」などの名作を生んだ。



②護心寺(北の弁天さん)
昭和10(1935)年まで、この場所に光心寺(現在、東小川1丁目)があった。鯛ヶ島の青峰さんとともに漁業関係者から厚く信仰されている。



④小泉八雲滞在の家跡
八雲が焼津で逗留していた山口乙吉の家があった場所。昭和43(1968)年に愛知県の明治村へ移築。



◀岩清蔵正面

▼岩清蔵



⑦浜通りの蔵群
蔵は屋敷の裏手(堀川沿い)を中心に建てられ、石蔵、土蔵、レンガ蔵などが点在している。石やレンガを漆喰などで化粧した蔵もみられる。工場などに使われている石蔵もある。

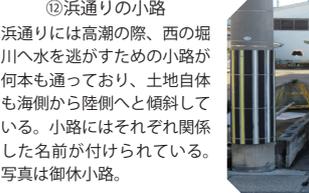


⑨札の辻の庚申像
江戸時代高札場だった場所。伊豆の長八の流れをくむ下村声峰の庚申像は、昭和12年(1937)に町内の安全を願って建立されたが、現在は室内に納められている。2代目の像は、平成30年に新調された。

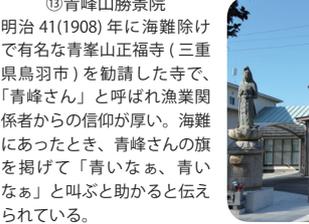
⑧波除けの堰板用の柱
高波の際、入口の両側にある柱の溝に板を落として、海水が家の中に入らないようにした。海水は、裏の堀川へ流れるように小路が配置されている。



⑪船元小路
浜通りのなかほどにはサカナヤと呼ばれる水産加工業者、その両端に商店や鮮魚商、さらにその外側に漁師(船元や船員)の住まいが配置されていた。船元小路(鯛ヶ島)には漁師の家が集中しており、小路の名前の由来にもなった。



⑫浜通りの小路
浜通りには高潮の際、西の堀川へ水を逃がすための小路が何本も通っており、土地自体も海側から陸側へと傾斜している。小路にはそれぞれ関係した名前が付けられている。写真は御休小路。



⑬青峰山勝景院
明治41(1908)年に海難除けで有名な青峰山正福寺(三重県鳥羽市)を勧請した寺で、「青峰さん」と呼ばれ漁業関係者からの信仰が厚い。海難にあったとき、青峰さんの旗を掲げて「青いなあ、青いなあ」と叫ぶと助かると伝えられている。

「浜通り」は駿河湾沿岸に沿って南北に伸びるほぼまっすぐな街道と、その街道を中心に形成された南北約1.5km、東西約0.6kmの細長い集落を指す名称です。浜通りは、北から北浜通、城之腰、鯛ヶ島の3地区に分かれています。集落内には、江戸時代に掘られ、かつては運河としても機能した堀川(黒石川)が北へ流れています。焼津漁港築港前は浜通りの砂利浜が河岸(漢)で、古くは廻船業にぎわいました。徳川家康から船足の早い八丁櫓を許されて以降、カツオ漁業が大きく発展したと伝わります。交通の要所でもあり、江戸時代の地誌には、「漁家商家相交りて繁華なる土地なり、焼津湊云々」(『駿河記』)と当時の繁栄ぶりが記されています。

その後、明治時代の東海道線焼津駅の開業、静岡での全国初の石油発動機付漁船の開発、漁船建造に必要な有力資本が焼津に成立したことなどにより、浜通りを中核として、焼津は遠洋カツオ漁業の先進地になりました。また、漁業の発展に伴って、鯉節に代表される水産加工業も一大飛躍を遂げました。焼津の名が全国に知られるようになったのは、浜通りで焼津漁業を盛り上げた先人たちの努力によるものといえます。明治時代の文豪、小泉八雲はこの地を愛し、夏になると浜通りの山口乙吉宅に泊まり、焼津にまつわる作品を残しました。浜通りが「八雲通り」とも呼ばれる由縁です。

浜通りには沿岸部特有の伝統的屋敷や小路、信仰の場所などが今も残っており、焼津の歴史と文化が息づいています。



③北の御旅所
この場所は、日本武尊が海から上陸した場所と伝わり、「北のオヤスミサン」とも呼ばれる。8月13日の焼津神社の荒祭りの神輿御渡では、御供捧役によって「小麦飯」などの特殊神饌が献上される。



⑤八雲地蔵(波除地蔵)
小泉八雲の逸話が伝わる波除地蔵。現在まつられているのは、昭和41(1966)年に新しく作られたもので、八雲の見た古いお地蔵様は、光心寺にまつられている。浜通りには、札の辻、安泰寺、青峰さんに波除地蔵がまつられている。



⑩ゴテン小路
周囲よりも高くなっていて、田中藩の御殿の跡と伝承されている。

⑥感恩の碑
石積み防潮堤の築造を主導した山口平右衛門と、海岸保全に尽力した高見三郎元衆議議員の業績を讃えた石碑。



⑭波除堤防モニュメント
高波の害から守るために、明治30年代から築造された総延長1,320mの石積み防潮堤の一部を模造したもの。集落側にも小堤防が築造され、二重堤防になっていた。

西側（内陸側）



代々素封家であった松村家の屋敷跡。「エンカさん」と呼ばれ親しまれていた。災害や飢饉が起きると私財を投じて付近の住民を救ったという。

⑮エンカ屋敷跡



⑯芋万（右）



浄土宗、天正 10(1582) 年開創と伝わる。江戸時代、漁師が海から引き上げた「魚籃観音」をまつる。



⑰常照寺



左⑱マルハチ、右⑳ぬかや



⑱帆屋（令和 2 年度に整備されました）



⑳安泰寺



二文小路、海へつきぬげると、御休町堤防の上り段あり



㉑丸の辻・庚申塚（波除地藏、津島神社も祀られる）

東側（海側）



丸の辻・庚申塚（波除地藏、津島神社も祀られる）



㉒二文小路



㉒二文小路

浜通り今昔 — 佐藤道外が描いた明治大正の頃の絵図と比べてみよう
 浜通りには、歴史あるお宅が多く残っています。浜通りに生まれた文人・佐藤道外の絵と比較すると、明治・大正の頃と現在の景観を重ねることが出来ます。
 浜通りに面する家は、タテコウジといわれるように町屋造りの形式で、間口の差はほとんどありませんが、奥に長い敷地を持っている家も少なくありません。通り沿いの建物は、向かって右側に出入口と通り土間を設け、左側を座敷とするのが一般的です。海浜部の風雨を避けるため、屋根は緩い勾配でしたが、石積み堤防の整備が進むと、二階家を増築する家も多くなり、防波堤の完成後は本格的な二階建ての建物が造られるようになったと考えられています。建物の高さや屋根の勾配からも、時代の移り変わりをうかがうことができます。

佐藤道外
 明治三十一（一八九八）年浜通りに生まれる。幼名小作。雅号は華鳳、道外。沖六鷲や上田桑鳩に師事し、書家として進む。書道の他、文人画、俳句、長閑、三味線などにも長じた。昭和四十三（一九六八）年七十一才で逝去。道外作の『明治大正焼津街並往来絵図』、昭和四十三（一九六八）年『焼津の町並みと風俗を洒落なタッチで描いた絵巻物で、古き漁師町を彷彿とさせる。ここに掲載した絵図は、『往来絵図』のうち、「大正初期焼津町本宿浜通」と「大正末期焼津町本宿通」の一部。『往来絵図』にはほか「大正初期江川橋見取図」と「大正末期焼津町新地通」、「大正初期焼津町新地通」がある。『大正初期大正町見取図』、『大正初期焼津町新地通』がある。